

乳幼児を持つ母親の育児不安の現状とその要因 (第2報) - 地域特性に注目して -

宮本政子^{1)*}, 舟越和代¹⁾, 中添和代¹⁾, 渋谷幸彦³⁾

¹⁾ 香川県立医療短期大学看護学科,

²⁾ 渋谷小児科クリニック

Uneasiness of Mother for Child-rearing and its Factor (Part 2) - Focused on Character of District -

Masako Miyamoto^{1)*}, Kazuyo Funakoshi¹⁾, Kazuyo Nakazoe¹⁾ and Yukihiro Sibuya²⁾

¹⁾ *Department of Nursing, Kagawa Prefectural College of Health Sciences*

²⁾ *Sibuya Pediatrics Clinic*

Abstract

The purpose of this paper is to report on the present condition and the factor of uneasiness of mother for child-rearing, especially in infantile period. Questionnaire about uneasiness for child-rearing were distributed to 51 mothers with infants who are living in A town, and 36 answers were collected. And we compared the results of the present study with those of the previous report obtained in M town.

The following results were obtained through the analysis.

1) Mothers in A town whose families are frequently consisted of a lot of member, and some generations compared with those in M town, had tendencies to alone take care of a child at night and to consult with their mothers rather than husbands when they were troubled.

2) There was not a difference in the degree of child-rearing uneasiness, between the group of mothers in A and M town. However, the group of mothers in A town has felt that there are a few supports from their husbands, and that they have not expected to talk about with the other mothers.

The analysis of the questionnaire showed that mothers with infants who are living in A town, a agricultural district have a big burden and stress in daily life for child-rearing, and that supports from the health professionals are needed to reduce those.

*連絡先: 〒761-0123 香川県木田郡牟礼町大字原281-1 香川県立医療短期大学看護学科

*Corresponding address: Department of Nursing, Kagawa Prefectural College of Health Sciences,
281-1 Hara, Mure-cho, Kita-gun, Kagawa 761-0123, Japan

Key Words：育児不安(child-rearing uneasiness)，育児支援(child-rearing support)，
乳幼児を持つ実母(real mother with infant)

はじめに

近年増加する母親の育児不安*や育児ストレスの増加は、子どもの健全育成を阻害するだけでなく、育児放棄や児童虐待などとの関連が認められている。次代を担う子どもを健全に育てることは人類全体の健康問題と深いかかわりをもつものであるだけに、育児支援は看護職として取り組むべき重要課題であり、その果たす役割は大きい¹⁾。

育児不安の要因は多岐にわたり、その概念についてもまだ明確にされていない部分もあるが、母親をサポートするための家族の果たすべき役割や、母親同士が地域社会と効果的な交流を持つことの意義が明らかにされてきている^{2) 3)}。

これらの点について前報⁴⁾では、育児不安の要因として夫との関係、その他の関連要因や、保健医療従事者の役割として育児交流の場の提供と育成が重要であることについて報告した。

しかし、母親が日々生活する環境としての地域の特性と育児不安との関連性の分析や、地域のなかでどう交流すればよいのか具体的な提案には至らなかった。

そこで今回は地域特性を踏まえた具体的な育児支援の在り方を明らかにすることを目的に、前報⁴⁾と同じ質問紙を用いた同調査を、家族背景や地域特性の異なる A 町でも実施した。A 町の調査結果を中心に、前報⁴⁾で取り上げた M 町との比較検討した結果も加えて報告する。

調査方法

1. 対象

本県 A 町及び M 町が実施するポリオ・BCG 予防接種対象の乳幼児を持つ母親266 (A 町51, M 町215) 名中、有効な調査表を回収できた183 (A 町36, M 町147) 名 (有効回答率68.9%) を対象とした。

2. 調査期間

調査期間は M 町2000年 1 月～3 月、A 町2001 年 4 月である。

3. 質問紙の構成

前報と同様の質問紙を用い、以下の 3 部で構成されている。

1) 対象者の属性 (表 2 の項目参照)

2) 吉田ら⁵⁾の育児不安スクリーニング尺度を用いた「母親の育児に関連する意識」；①育児不安感、②育児満足、③自己効力、④夫のサポート、⑤子どもの育てやすさ、⑥相談相手 (育児不安感、夫のサポートについては表 3、4 の項目参照)

3) 母親同士の交流についての経験と希望

4. 調査地の概要

A 町と M 町は同じ郡に所属する町で隣接しており、県庁所在地である T 市に近い。とくに M 町は近年 T 市のベッドタウンとして新興住宅も増え、昭和35年以降人口は毎年増えており、人口密度は郡部としてはかなり高い。年齢構成では65歳以上の老年人口比率が16.3%で、香川県全体の20.4%に比べても低く、若い年齢層の住人が多い。これに比べ A 町では、面積は M 町とほぼ同じ広さであるが、山間部や海岸線が多いこともあり人口は約 3 分の 1 で、年間出生数は M 町の 6 分の 1

表 1 対象調査地の概要

項 目	A 町	M 町
面 積 (km ²)	15.82	16.48
人 口 (人)	6,663	18,200
平 均 年 齢 (歳)	44.2	39.2
出生数 / 年 (人)	33	184
女性就業率 (%)	46.8	48.3
老年人口比率 (%)	25.2	16.3
第 1 次産業割合 (%)	11	4.6
世帯人員数 (人)	3.28	2.93

平成12年100の指標香川より

* 育児不安：吉田ら⁵⁾の定義に基づき「育児に伴う自信のなさや不安、子どもと関わることの疲労感、育児からの逃避願望や社会からの孤立感」とした。

である。また1世帯の人数や65歳以上の老年人口が多く、複合家族の割合も高い。魚港を有し、漁業や農業などの第1次産業従事者の割合が高い。(表1)(平成12年100の指標香川参照)

5. 調査手順

前報と同様にポリオ・BCG 予防接種対象の母親に質問紙を郵送し、回答は無記名とし、接種来所時に回収した。

6. 分析方法

1) 育児不安について

前述した質問紙のうち、「母親の育児に関連する意識」の各質問項目について、1「全くそうは思わない」(1点)から、4「よくそう思う」(4点)までの4段階で回答を求め、育児不安に関する16質問項目の総得点から低不安群、普通群、高不安群に分類した。さらに各群別の人数割合、得点値の平均、各質問項目毎の回答結果などについて2町を比較検討した。

2) 母親同士の育児交流について

交流についての経験や希望、自由記述の内容について2町を比較検討した。

3) 統計処理はエクセル統計処理 ystat2000.xls および統計解析ソフト SPSS 10.0jfor Windows を用いた。

結 果

1. A 町の対象者の属性

A 町の母親の平均年齢は「27.9歳」で、M 町に比べやや若く、家族構成では複合家族が多かった。子どもの数が全体的に多く、「夜間」の子どもの養育者は「母親だけ」が多かった。母親の仕事の有無では「専業主婦」が多く M 町とほぼ同様の結果であった。「友達がいる」、「育児の協力者がいる」と回答した母親が圧倒的に多かった。夫の平均帰宅時間も M 町の結果とほぼ同様であった。

また、育児に困った時の「相談相手の1位」では、M 町に比べ「夫」が少なく「実母・義母」が多かった。(表2)

2. 育児不安について

1) A 町の母親の育児に関連する意識

『育児不安』の16項目の質問に対し、80%以上の母親が「そう思ったことがあった」のは「疲れやストレスがたまっていてイライラする」、「自分の子育ての方法はこれでいいのだろ

表2 対象の属性比較

		n=183	
属性	カテゴリー	A町 (n=36)	M町 (n=147)
母親の平均年齢		27.9歳	29.7歳
平均家族成員数		4.92	4.05
		人(%)	
家族構成	核家族	19(52.8)	119(81.0)
	複合家族	17(47.2)	28(19.0)
子どもの数	1人	13(36.1)	72(49.0)
	2人	13(36.1)	53(36.1)
	3人以上	10(27.8)	22(15.0)
昼間の養育者	母親(本人)	24(66.7)	118(80.3)
	母親以外	12(33.3)	29(19.7)
夜間の養育者	母親(本人)	23(63.9)	72(49.0)
	母親以外	13(36.1)	75(51.0)
仕事の有無	専業主婦	26(72.2)	107(72.8)
	仕事有り	10(27.8)	38(25.8)
友達の有無	有り	31(86.1)	109(74.1)
	無し	5(13.9)	35(23.8)
育児の協力者	有り	34(94.4)	138(93.9)
	無し	2(5.6)	7(4.8)
夫の帰宅時間	18時未満	9(25.0)	38(25.9)
	18~20時未満	14(38.9)	59(40.1)
	20時以降	12(33.3)	50(34.0)
	その他	1(2.8)	0(0)
相談相手 (1位)	夫	14(38.9)	98(66.7)
	実母・義母	15(41.7)	31(21.1)
	その他	7(19.4)	18(12.2)

うかと思うことがある」「自分はうまく子どもを育てていないと思うことがある」、などの8項目で、そのうち7項目はM町の母親と同じ項目であった。M町と違いがみられたのは「ゆったりとした気分で子どもと過ごせない気がする」であった。(表3)

『夫のサポート』について町別に比較したものが表4である。A町の母親は7項目すべてについて「よくそう思う」と回答した割合がM町より低かった。特に「夫は家事に協力的である」、「夫は自分のことを理解してくれていると思う」の2項目は「よくそう思う」が低く、また、「夫と自分の二人で子どもを育てている感じがする」「夫は自分のことを理解してくれていると思う」が「全くそうは思わない」と回答した母親が多かった。(表4)

『育児満足感と自己効力感』、『子どもの育てやすさ』、『相談相手の有無』については概ねM町の母親と同様の結果であった。

2) 町別比較

育児不安の16質問項目の総得点から、低不安

表3 母親の育児に関連する意識；育児不安感（A町）

n=36

質問内容	回答	よく+時々+いくらか そう思うの合計	全くそうは思わない
		% (人)	% (人)
疲れやストレスがたまっていてイライラする。		97.2(35)	2.8(1)
自分の子どもの育て方は、これでいいのだろうかと思うことがある。		97.2(35)	2.8(1)
ゆったりとした気分で子どもと過ごせない気がする。		93.3(30)	16.7(6)
自分はうまく子どもを育てていないと思うことがある。		91.7(33)	8.3(3)
子どもを育てていて、どうしたらいいかわからなくなることがある。		86.1(31)	13.9(5)
育児や家事など何もしたくない気持ちになることがある。		86.1(31)	13.9(5)
子育てを離れて一人になりたい気持ちになることがある。		80.6(29)	19.4(7)
体の疲れがとれずいつも疲れている感じがする。		80.6(29)	19.4(7)
自分は子どものことをわかっていないのではないかと思います。		75.0(27)	25.0(9)
子どもを育てる自信がないと思うことがある。		69.4(25)	30.6(11)
子どもをたたいたりしかったりしたときにくよくよ考える。		66.7(24)	33.3(12)
子どもを育てていて自分だけが苦勞していると思う。		61.1(22)	38.9(14)
毎日生活していて心に張りが感じられない。		55.6(20)	44.4(16)
だれも自分の子育ての大変さをわかってくれないと思う。		50.0(18)	50.0(18)
何か心が満たされず空虚である。		47.2(17)	52.8(19)
一人で子どもを育てている感じがして落ち込む。		44.4(16)	55.6(20)

表4 母親の育児に関連する意識；夫のサポートの町別比較

n=183

質問内容	回答	よくそう 思う	時々そう 思う	いくらか そう思う	全くそう 思わない
夫は家事に協力的である。	A町	13.9	30.6	33.3	19.4
	M町	29.3	27.2	27.9	15.6
夫と自分の二人で子どもを育てている感じがする。	A町	27.8	13.9	25	30.6
	M町	33.3	24.5	23.1	18.4
夫はよく相談相手になってくれると思う。	A町	27.8	19.4	30.8	19.4
	M町	38.3	25.9	21.8	13.6
夫といろいろなことを話す時間がある。	A町	33.3	27.8	27.8	8.3
	M町	40.8	24.5	26.5	8.2
夫は子どもの相手をよくしてくれる。	A町	44.4	22.2	27.8	2.8
	M町	45.6	30.6	21.1	2.7
夫は自分のことを理解してくれていると思う。	A町	13.9	30.6	33.3	19.4
	M町	33.3	32.7	25.2	8.8
家庭内の重要なことを決定するのに夫がいてくれてよかった。	A町	55.6	30.6	11.1	0
	M町	60.5	18.4	15	6.1

群，普通群，高不安群に分類し，不安の程度と対象数，平均得点値について2町を比較した。A町では，高不安群の占める割合が多く，平均得点値もM町に比べ高かった。育児不安以

外の「母親の育児に関連する意識」の得点値を比較すると，A町では「夫のサポート」の7項目の平均得点値がM町に比べ低かった。

高不安群の家族構成ではA町，M町ともに

高不安群の占める割合は核家族が複合家族に比べ多く、A町では複合家族における高不安群の割合が高い傾向にあった。(表5, 6 および図1)

表5 育児不安の比較

n=183				
	総得点値	不安の程度	A町人(%)	M町人(%)
低不安群	25点以下	軽い	3(8.3)	19(12.9)
	26~30点	やや軽い	7(19.4)	30(20.4)
普通群	31~41点	普通	14(38.9)	59(40.1)
高不安群	42~45点	やや高い	5(13.9)	14(9.5)
	46点以上	高い	7(19.4)	25(17.0)
不安得点の平均値 (標準偏差)			37.5 (9.1)	35.1 (9.3)

表6 育児不安以外の得点値の比較

n=183				
質問項目尺度	満点値	A町 平均値 (SD)	M町 平均値 (SD)	
育児満足感 自己効力感	(44点)	36.7 (4.80)	37.5 (4.91)	
夫のサポート	(28点)	18.7 (5.55)	20.7 (5.30)	
子どもの育てやすさ	(15点)	10.1 (2.04)	10.2 (1.97)	
相談者の有無	(8点)	7.0 (1.29)	6.96 (1.50)	

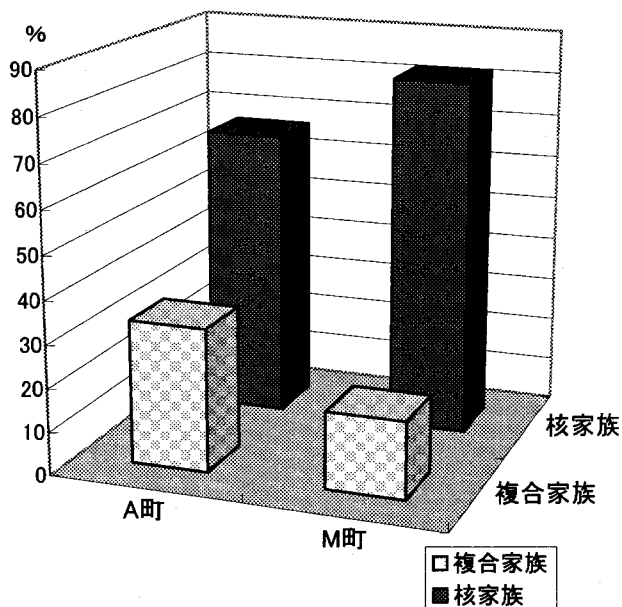


図1 母親同士の交流の場への参加

3. 母親同士の交流の現状と希望

「母親同士の交流があるか」の質問に対し、「参加したことがある」がA町では19.4%で、その内容は「愛育会」主催の親子体操、料理教室などの子育て支援活動であった。「交流の場があれば参加を希望するか」について2町を比較するとA町では「希望しない」がM町に比べ多かった。

図4は高不安群の母親の育児交流についての希望を比較したものである。高不安群でも、A町では交流の希望が少なかった。またA町の交流経験のある母親7名は全員「交流を希望する」と回答していた。

「具体的にどのようなメンバーと交流の場を持ちたいか」の自由記述では、A町の母親9名が回答し、その内容を表7に示した。現在A町で実施している愛育会の育児サークルの回数を増や

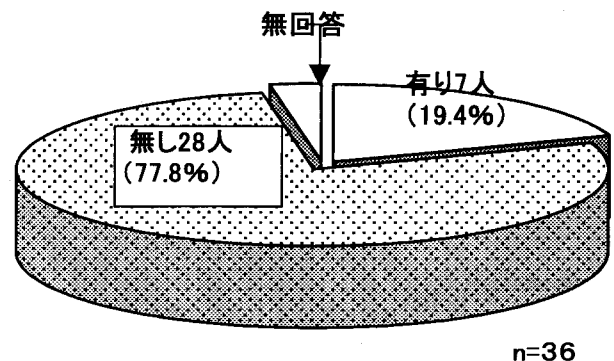


図2 母親同士の育児交流の経験 (A町)

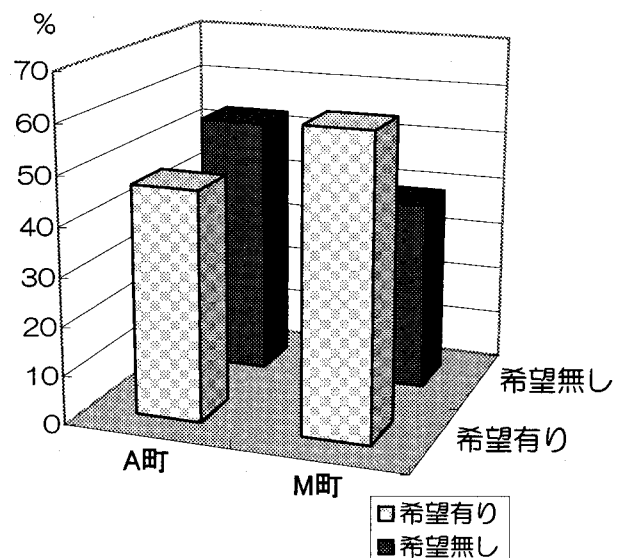


図3 育児交流の希望

表7 母親同士の交流の希望（自由記述；A町）

- ・愛育会の育児サークルの回数を増やして欲しい
- ・行政が主催するものでなく、始めて参加するひとに気軽に輪の中に入れる場があればよい。
- ・参加して意義（メリット）のあるサークル活動の場があればよい。
- ・子どもと親が遊べるような交流の場があればよい。
- ・全く知らない人の集まる場がよい。
- ・未就学園児の母と子が会える日を週1回ぐらい設けて欲しい。
- ・一緒に手芸をしたりお菓子づくりをするような場があればよい。
- ・同じ問題をもつ子どもを育てている母親同士の集まりに参加したい。
- ・託児つきで親だけで話し合いや相談ができる場が欲しい。

（36名中9名が回答）

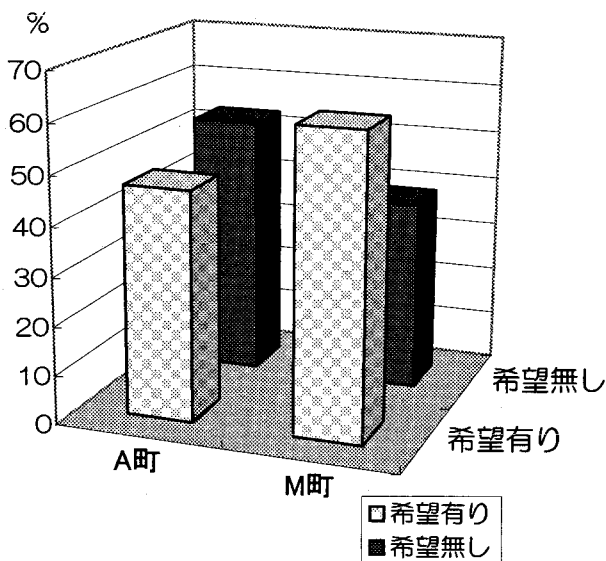


図4 育児不安高群の育児交流への希望

して欲しいという意見や、行政が主催でなく、全く知らない人の集まる場や、同じ問題をもつ親同士の集まりや親子で遊べる場などを望んでいた。（図2～図4および表7）

考 察

1. 育児不安について

地域を基盤にした保健医療活動を展開していくためには、対象となる人々の地域社会全体や、所属する集団、家族、各個人の特性をとらえ、その成長、発達、成熟、日常生活も考慮にいれて総合的に活動する必要がある⁶⁾。とくに地域社会は人々の生活の場であり、地域社会特有の文化、習

慣、経済、気候、などその特徴を踏まえた活動が重要である。

地域社会はその特徴によっていろいろな分類がされるが、一般的には都市的地域と農村的地域に分けられる⁷⁾。今回調査したA町はまさに農村的地域で、M町は都市的でない部分もあるものの、山本⁸⁾の保健学的比較によると都市的地域に分類される。一般的に農村的地域の育児は、親戚や近隣の人々の関わりが多く三世同居も多いため、母親一人の負担が少なく育児不安が少ないと考えられている。著者らもA町の母親の方が育児不安は少ないと考えていた。しかし今回の結果では、A町の母親の育児不安は、核家族の多いM町とほぼ同じ傾向であり、不安得点の平均値はA町がむしろ高かった。農村的地域は自然が豊かで、交通事故などの危険も少なく、子どもにとってのびのびと育つ環境としてメリットも多い。その一方で、人の移動が少なく、地縁・血縁的結びつきが固く、伝統や習慣を重んじることが多く、従来からの性別役割分業意識が強い。育児の大半を母親一人で担うのが当たり前とする社会的風土があり⁹⁾、A町の夜間における養育者の現状とも一致していた。

また夫婦関係と育児不安の関連性についても多くの報告^{10)・11)}があり、前報⁴⁾でも不安の高い母親ほど、夜間の養育者として「夫」を認知していない割合が高いことについて報告した。今回の結果でも「困った時の相談者」や「夫のサポート」の平均値から考えると、A町では複合家族の割合が高く、世帯人員も多いだけに母親の家事労働の負担が大きく、核家族の多いM町の母親に比

べ、夫婦の連帯関係が弱いことが推測される。夫から情緒的なサポートのある妻は育児ストレスが低く、母子間の愛着が安定する傾向にあり¹²⁻¹³⁾、農村的地域の問題として夫婦関係を重要視しなければならない。

2. 母親同士の交流について

前回の調査⁴⁾では、乳幼児の育児を行っている多くの母親は、育児不安の有無に関わらず、地域における母親同士の交流の場を望んでいた。育児支援における自主的交流の意義について、母親の思いを交流することにより刺激や共感が得られ、自分の方法でよかったこと、思い間違いをしていたこと、他の人も同じを思いを持っていることに気づき、精神的な緊張が緩和される⁶⁾。しかし、A町の母親はM町の母親に比べ交流を希望する回答は少なかった。これはA町の母親は交流経験そのものが少なく、狭い地域で知り合いが多く自由に話しができないことや、家事負担や嫁姑との関係などで外出しにくいことなどが原因と考えられる。農村的地域では文化・教育・娯楽的施設利用も少なく、余暇時間も短く閉鎖的になりやすいという報告⁶⁾もあり、今回の結果と一致していた。

M町との比較では希望は少なかったが、半数近くの母親は交流の場を求めており、このニーズに対応しなければならない。育児不安の回答や家族背景を考慮すると、交流の場を企画するにあたっては夫婦関係を強めることや、家族の理解について留意することが大切と考えられる。また「知らない人と交流したい」という意見もあり、近隣地域で行われている活動についての情報提供や、交流の意義を知らせるなど、自ら主体的に行動できるような環境整備への取り組みが重要と考える。

ま と め

今回の調査ではA町に在住する乳幼児を持つ母親51名に吉田らの育児不安スクリーニング尺度を用いた質問紙を配布し、36名から回答を得た。A町の回答結果の分析と、前報で報告したM町の乳幼児を持つ母親147名の回答と比較検討した。A町とM町の分析対象数に差があり、2町間の比較検討結果の信頼性と妥当性については限界と課題があるものの、その結果の概要は以下のとおりであった。

1. A町の乳幼児を持つ母親は、世帯人員が多

く複合家族である割合が高かった。M町の母親に比べ、夜間の育児を母親だけで行う割合が高く、育児に困った時の相談者として、夫より実母や義母を頼りにしていた。

2. 育児不安についてはA町とM町はほぼ同様の結果であったが、A町の母親は夫のサポートが少ないと感じていた。

3. 母親同士の交流については、A町の母親は交流の経験も少なく、希望も少なかった。

これらの結果より、A町のような農村的地域の乳幼児をもつ母親に対しては、育児交流の場を設けることも重要であるが、その必要性の周知や情報の提供を行い、家族の理解を得て積極的に参加できるような環境づくりが重要であることが示唆された。

謝 辞

本調査に快く承諾し協力していただいたお母様方に心から感謝致します。

文 献

- 1) 前原澄子(2000)ライフサイクルと豊かな子育てへの援助。家族看護学研究, 5(2): 114-117.
- 2) 篠崎澄子(2000)地域における子育て支援ネットワーク作りと看護の役割。家族看護学研究, 5(2): 130-132.
- 3) 岩崎順子(2000)乳児を抱える母親の Maternal Confidence と家族サポート。家族看護学研究, 6(1): 101.
- 4) 宮本政子, 舟越和代, 中添和代, 時岡恵美, 森美代子, 瀧谷幸彦(2000)乳幼児を持つ母親の育児不安の現状とその要因。香川県立医療短期大学紀要, 2: 115-121.
- 5) 吉田弘道, 山中龍宏, 巷野吾郎, 太田百合子, 中村孝, 山口規容子, 牛島廣治(1999)育児不安尺度の作成に関する研究- 1歳半児の母親用試作モデルの検討-。チャイルドヘルス, 2(2): 45-49.
- 6) 飯田澄子, 金川克子編(2001)“保健学講座1 地域看護学概論”, メジカルフレンド社, 東京, p. 86-267.
- 7) 厚生省監修(1999)“平成10年版 厚生白書”, ぎょうせい, 東京, p. 134.
- 8) 山本幹夫(1975)“実践的公衆衛生学 健康管理概論” 光生館, 東京, p. 158.
- 9) 中川英一(2001)妊娠・出産・育児とジェンダー問題。家族看護学研究, 6(2): 152-157.
- 10) 首藤敏元(1997)夫婦関係と子ども。ペリネイタルケア, 16(9): 37-42.

- 11) 大日向雅美(1996)日本的な母子関係と夫婦関係．現代
のエスプリ，342：137-143.
- 12) 矢倉紀子(2000)母親の育児感とその関連要因．家族看
護学研究，6(1)：97.
- 13) 巴奈緒美，泊祐子(2001)幼児を持つ夫婦の性別役割と

妻の育児不安との関連について．家族看護学研究，7
(1)：100.

受付日 2002年1月15日